

心的外傷と精神病におけるイメージの心理療法

—その回復過程の異同に関する一考察—

片山知子

本論は、心的外傷と精神病を抱えるクライアントとの心理療法における象徴化機能の回復過程の異同を考察することを目的としている。この考察では、ウィニコットの中間領域を可能とする境界の生成を指標とし、その異同を事例において検討する方法をとった。

本論は、第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部、終章によって構成されている。その特徴は、第Ⅱ部、第Ⅲ部における事例研究を中核とし、臨床実践と近いスタイルで論じるために、クライアントの診断やみだてから個々の心理的な問題へと観点を移し、事例を考察して結論を導き出す形式をとったことにある。

内容を詳述すると、第Ⅰ部第1章では、象徴化機能の最たるものとして喃語からことばの発達によるシンボル形成の経緯をとりあげた後に、統合失調症への罹患による象徴化機能の破綻を概観した。第2章では、ヒステリー研究、戦争神経症、虐待における複雑型 PTSD へと解離に関する研究の時代による変遷を追い、心的外傷者と統合失調症などの精神病者の状態象には重なることが多く、区別することが困難だとする近年の解離に関する研究をとりあげた。このような研究から、統合失調症者の臨床研究が心的外傷者の臨床研究に新たな観点を与える可能性を考慮する意味に触れた。第3章では、イメージの象徴表現による自己治癒への着目から始まった箱庭療法が、精神科領域において統合失調症者の箱庭療法におけるイメージの構造面の研究が発展したことをとりあげた。その研究の中でも象徴化機能と内的距離に関する研究に特に着目した。そして第Ⅰ部の最後に、ウィニコットの中間領域に関する理論から、イメージの創造が可能となる自他の境界生成に関する問題を論じ、各事例を検討する際の方法となるテーマを提示した。

本論の中核となる第Ⅱ部、第Ⅲ部の事例研究を詳述すると、心的外傷者の事例研究第Ⅱ部第4章においては、ことばに問題がみられた遺棄児との遊戯療法を介し、自他の境界の生成からことばが派生し象徴化機能を獲得する過程について論じた。第5章では愛着障害を抱えた被虐待児との遊戯療法において、クライアントが虐待体験から生じる幻想から距離を繰り返し獲得することによる主体性の変化と象徴化機能の回復の関係について論じた。第6章では PTSD を抱えた身体的被虐待児との心理療法にお

いて、身体図式が破綻した状態から象徴化機能が回復する過程について論じた。次に精神病患者とのイメージの事例研究第Ⅲ部第8章では、統合失調症を抱えるクライアントとの心理療法を通し、こころ再構築によって妄想との境界を生成することと居場所の獲得の関係について論じた。第9章では、第8章のクライアントと、一過性の精神病状態に陥ったクライアントとの箱庭療法の記録に関して比較検討することで、統合失調症者における箱庭療法の意義について再検討した。第10章では、頭部外傷や多くの問題を抱える女性との箱庭療法を通して、語りと箱庭イメージから自他の境界が生じ、視覚的なイメージとことばが相互作用し感情が統合され、クライアントが象徴化機能を回復し生活に適応した事例について検討した。

終章では、心的外傷者と精神病患者の事例を通してみられた、自他の境界の再構築による幻想からの距離の生成と象徴化機能の回復の関係を総括した。両者の心理療法では、逆転移によるセラピストの構えが心理療法の準備性や防衛壁として働き、身体感覚を介した二者関係によって再構築した外と内および自他の境界が機能しはじめた。その後二者関係における中間領域に過去のイメージがみられた。このイメージは、ウイニコットの中間領域に生成される幻想だと考えられた。クライアントが語り表現した過去の体験に関するイメージは、自閉的なイメージとして捉えられる妄想とは違い、他者との共有が可能な移行対象としてのイメージとして考えられる。このイメージを共同注視することによって、心理療法においてこころの作業が可能となった。例えば、心的外傷者においては、セラピストが目撃者となり、クライアントの感覚や感情が統合され、問題に焦点づけがなされた。心的外傷者は、このようなこころの作業によって、クライアントは、混乱する原因となる幻想との距離を獲得し、現実見当識が戻った。その後心的外傷を抱えたクライアントは、過去の体験がひきおこす幻想と現実の区別がつき、象徴化機能が回復した。また精神病患者においては、二者関係で生成したイメージを共有する事によって、心理的な構造を再構築し、妄想との距離を獲得することによって関係性を基盤とする象徴化機能の再獲得がみられた。その後精神病患者は、日常生活能とする主体性が再構築されたと考えられた。このような経緯を経て、心的外傷者と精神病患者いずれの事例においても自他の境界が再構築されると、妄想や幻想と自我との距離が生成され、象徴化機能が回復した。その違いとしては、心的外傷者のこころの再構築は力動的であり、その思考のプロセスは潜在的だった。それに対して精神病患者のこころの再構築は、思考のプロセスがイメージやことばによって顕在化された違いがみられた。しかし心理療法の終盤には、それぞれのクライアントは、妄想や虐待体験から生じる象徴化できないイメージ（幻想）から主体が距離を

とるための境界を生成する作業が終わると、心理療法が過去となり今が成立し、それぞれのあり方で社会生活を始めた。

事例検討からは、PTSDにおけるフラッシュバックなどを体験する心的外傷者にも、統合失調症などの精神病を抱えるクライアントへの逆転移の研究にみられるような配慮に心理療法的な意義がみられた。このような関係性を基盤に、中間領域におけるイメージの生成が可能だということは、人間の根本的な関係性を基盤としたイメージの生成、つまり自他の境界とその移行対象としてのイメージやことばの生成による心理療法における関係性を構築する可能性として考えられた。